

地球第十一卷第四號

昭和四年四月一日

戰爭の地理學的考察 (三)

小 川 琢 治

七

交戦地域には其の周邊にも又た内部にも多少の土地の凹凸があり、又た之を缺く場合と雖も人工的の之に代る地物は必ずあるを常則とし、之を防守し又たは占領すれば軍隊の防禦力又たは攻撃力が著しく増加する。山嶽、隘路、豁谷の落合、道路及び鐵道の交叉點、橋梁、淺瀬、人口の大中心等は各地理的對象即ち地物として異つた意義を有し、或は防禦軍の支持點となり或は作戰の限界となる。此等は何れも主要作戰又は局部的作戰に對する主點 Subjectis 又は目標 Objectis となる。戰場に於ける此等の地點は戰略の點であつて、その地理的地位の意義から言へば之を地理學的戰略點 Strategico-geographical point と呼ぶべく、行動する軍の關係上から言へば操兵上の戰略點 Strategic point とする。

軍事地理學の研究には先づ戰略點を考察するを要し、一國又は一戦局の戰略點の中特に重要にして戰役に決定的影響を生ずるので主要の目的となるものを主要目的 Principal objective と呼ぶ。一

國の首府は國家の活動及び生命の大部分を代表する意味と、國意に對して大勢力を有する意味とで主要目標たるは言ふまでもない。一八四九年北伊太利戰役に於けるトリノは奥軍の主要目標となり、一八五九年聯合軍の方は奥國の占領したロンバルデー及びヴェネチア諸州を占領する爲めにプロナが主要目的となり、一八七〇、七一年の普佛戰爭では巴里と柏林が兩國の主要目標となつた。攻撃軍又は防禦軍の進路に散在する戰略點は主要目標に至る間の階段であつて、攻者は努力して順次これより敵兵を驅逐して略取して進まねばならぬ。若し防禦軍にして此の如き中間點に兵力を集合してゐるならば、その戰略點は作戰上極めて大なる價值を有し、主要目標に達する爲めに決戰的行動に出でねばならぬことになる。

故に軍が占據する地區は何時も重要な戰略點となり、敵軍の兵力は之に向けられ、その重要な程度に應じて強大なる兵力が必要となり、又た從つて之を克服する爲めに占據する兵力の配置に對して確知せねばならぬ。兵力の分配の如何に關らずその攻撃は支持點から隔離することの最も容易な何れかの翼に向ふを原則とし、若し敵軍の箇々の部隊の間に戰略的關係の良好でなく、又た各箇軍團の集合十分ならぬ場合には打撃をその中心に加へるを便とすることもある。

操兵の目標の選擇は常に戰略の最も六ヶしい問題の一であつて、その解決には偉大な軍事上の頭腦を要し、且つ戰局の種々の事情を正當に見積るを要する。此の選擇に遺算がなければ敵軍の占據する土地及び之に達するに最も便利な線路を掌握する手段が得られ、之を決定的戰略點と呼び、又た戰略的作戰全體の成功を左右する占據點を決定的戰略點 *Decisive strategic point* と呼ぶ。

一八四九年戰役の時、埃軍の侵入した國の首府トリノが主要目標であつた。故にビードモント人も亦た彼等の主點たるトリノを掩護する爲めに力を盡さざる可らざる直接の利害を感じた。而して兩軍の中間に幾つも主點と目標とがあつた。若し作戰がポー河左岸に向けられるならばセジア、ドラ兩河線がそれで、モルタラ、ノワラ、ブエルツェリ、キワツの諸市は此の線上に在り、ワレンツェ、カザラも亦た少くも主要目標に向ひ作戰を實行し得る爲めの陽動として極めて重價な地點であつた。又たポー河右岸ではアレクサンドリア及びタナロ、アスチ、ワレンツェ、カザレの線が主要目標となつた。

ビードモント軍はサルツァナ、オレッヂオ間のポー河の兩岸に戰略的位置を占めて、その正面を餘り廣く展開した爲めに、中央は主力を以つて擊破され得ることとなり、埃軍司令官ラデッキはバグリアからカワ河上に向ひ之を試み、敵軍をポー河から逐斥して漸次アルプス山麓に押しつけた。次いでロメリナ地方の諸線の結び目に當るモルタラが埃軍の手に落ち、敵軍の主要支持線たるポー河から敵軍を隔離し得たのである。

埃軍の法王軍司令官ラモリシエルに對する野戰では主要目標は敵軍そのものであつた。法王軍はアペナイン山脈の兩側に跨つて兵力を配置してゐたから、埃軍は山を越えてコマルカの方面に還ることを成るべく迅速に妨げて、アンコナの方向へ撃退せんとした。此の手段として法王軍に迫り中央伊太利で一戰するかナポリ國に退却する外ならしめる爲めに、先づ山間のベルヂア、フアリニヨ、スポレトを操兵上の目標とし、次いでラモリシエル軍の羅馬に退くを妨ぐる爲めにロレト、アンコ

ナ間の交通線とカステル^キダルドとを占領することとなり、法王軍のアンコナに入り抵抗を續くことを不能ならしめる目的を達したのである。此場合に結局カステル^キダルドが決戰的戰略點となつた譯である。

此のラデッキの作戰の成功は塊國伊太利に於ける頽勢を挽回し、ビードモント國王チャーレス・アルバートをして位をブクトル、エマヌエル第二世に譲るの外なからしめ、伊太利統一運動も亦た一時頓挫を來したことは周知の事件である。

以上述べた所を東亞に於ける近年の戰爭の例により證明すれば、明治二十七年、八年（一八九四、五年）の日清戰爭に於ける初期に在ては、兩國間の係争問題の性質上から朝鮮半島に出兵した清軍を掃蕩するを要し、大同江北の平壤に占據した主力を目標として兵を進め、第二期に至つて此の第一軍は鴨綠江右岸の九連城から安東縣に至る防禦軍を打破して鳳凰城の戰略點を奪ひ、奉天を主要目標として進んだ。第二軍は海上から魏子窩に上陸して、奉天營口との交通線を遮斷して旅順要塞の戰略點を攻略して、その左翼の支持點を奪ひ、北進して大石橋、蓋平、海城の諸戰略點を占領し東西に走る大子河の溪谷の口を扼する遼陽に向はんとし、安東縣から岫巖を経て海城に至る遼東半島の山間の戰略點をも手に入れて、未だ遼陽總攻撃に至らずして兵を收めたのである。

明治三十七、八年の日露戰爭に當ても、第一軍は鴨綠江北の露軍を破つた後鳳凰城、本溪湖を占領して遼陽を北から包圍せんとし、第二第三兩軍は同じく半島の南岸に上陸して奉天旅順間の交通線を遮斷し、北進して遼陽に向ひ、九月之を陥れ、十月砂河會戰の後更に北進して壘濠に據り對峙

することとなり、第一年を終り、翌年春に至り旅順を陥れた第四軍と鴨綠江軍が最左右翼に参加した後に奉天に向ひ、クロバトキン軍は遼陽戦では比較的巧妙なる退却をなし得たるも、此の時には混亂状態に陥り、終に遙かに長春方面に退却し、奉天戦は第一期作戦の決戦となり、主要目標たる奉天の占領と共に、盛京全省が我が手に入つた。

八

敵對行動の開始に當り兩軍間の國境を限界としてその背後に兵力軍資を集め、又た地物を利用して防禦線を張ることは前に述べた如く、攻撃軍は此の如き支持點から行動を起して敵國の侵入を試むべく、又た之に對する防禦軍は國境から少しさがつた適當なる距離に要塞陣地等に據つて第一の抵抗を試みるのである。

故に國境に隣接する兩地區は兩様の機能を有し、一方では支持點となり攻撃軍の攻勢を取る出發點ともなり、之を作戦根據地 Base of operation と呼び、他方では防禦軍の最初の抵抗をする處となり、之を第一防禦線 The first line of defense と呼ぶ。

作戦根據地は國境上又は之より短距離に在る地帯で、戰略點の若干數より且つ地物により十分に掩護されてゐるを要し、此處に軍資を集めて攻勢の作戦を起すのである。防禦軍には此の地帯が第一防禦線となり、その背後に軍資を集め支持點の連絡を有する根據地を必要とする。

佛伊國境に就いて之を説明すれば、サブア、ドーフキネ、プロブワンス、ニスハ佛國の側の此の國境に沿ふた地帯であつて、何れも高山地方であるから防禦に便である。その中初の三者は防備も

あり伊國との交通上にも重要である。故に此等の地點は立派な根據地となり之を連絡した線も亦た立派な防禦線となる。

伊國側でもアルプスの斜面が第一防禦線を成してゐるが、攻守の作戰根據地は遙かに後方のポー河上に在る。佛國側の斜面に降り、確實に之を占領するに非ざればアルプス地帯には根據地として役立つ處がない。

敵國に侵入する軍は作戰の進行に従ひ次第に根據地から遠ざかることになつて、その支持に頼り難くなり、餘り遠ざかつては危くなるから、數回の行進後には順次支持點及び新しい根據地を設けることが必要となる。

防禦軍では之に對して國境から更に内部に當る新しい防禦線により掩護されることになり、その地物としては戰域を區分する河流線又は山嶽線が尤も利用に適してゐる。

此等の關係の結果として主要根據地と第二次根據地の區別が生じ、第一根據地は國境に在るを常則とし、是から六七八回の行進程を隔て、第二、第三の根據地が設けられる。

數十年以來鐵道及び電信の敷設により距離と時間の關係が一變し地方間の距離が短縮したから、國境に全國から必要な軍資を輸送し、作戰根據地に之を集合し得ることとなり、以前の如き比較的に短い距離に非ざれば敏活な聯絡を取り難かつた時代と隔世の感がある。

之と同じく守者にも主要防禦線と第二次的防禦線の區別が起る。

作戰根據地とは特殊の目的を有する作戰を支持する爲めに一時設ける根據地を意味する。普佛戰

争の時の上部アルサスがソーヌ、里昂の方向に策動するエルデル軍團の根據地となつたのはその例である。

根據地が攻勢の作戰と必要の場合の防禦との兩様の目的に適合する主要條件は三つある。

第一は正面が相當な障礙物により掩護され、側面も亦た地物又は中立國により保護され、而かも餘り狹隘なる爲めに敵軍の操兵により包圍に陥る危険のないこと。

第二は相當の深みのあること、之を換言すれば兵員兵器その他の軍資を集めて防備を組織するに足る地帯を包括すること。

第三は鐵道、道路の交通機關が十分で背面及び左右に連絡し、且つ處々に要塞があり、又た攻勢の場合に安全な出口あること、である。

獨逸の場合ではライン河線は恰好の根據地でもあり、又は防禦線でもある。此の大河は左右に瑞士と蘭との中立國を控へ、且つ兩國は山嶽河流の關係上兵力の運用に適しないから、側面は頗る安全である。その正面は天險の外に立派な要塞がある。

九

攻守何れの場合にも根據地から目標に向ひ行動を起すに當り、通例各種特殊兵を含む若干の縱隊 Columns を成して目標に達する大小の通路を行進する。此の如き線路 *Lines* の全部を總括して作戰線 *Line of operation* と呼び、攻者は之に沿ひ行進するが、守者は退却するから、之を退却線 *Line of retreat* と呼んで區別する。

此等の線路中主要縱隊の行進するものを行進導線 *Directrix of the march* (*Directrice de la marche*)と呼ぶ。

一八五九年の北部伊太利戰役に當り、聯合軍は三縱隊を成してテシン河を渡り、ガリバルデーはセストへ、正規兵はツルビゴ及びマデェンタへ、佛軍の主縱隊はノワラ、デェンタ街道を進んだから、此の第三者が行進導線となつた。

六月四、五兩日に互るマデェンタ戰はマクマオンの名を揚げた佛軍の勝利で、七日ミラノに入城したが、その後の行動は全軍アツダ河に向ひ五縱隊となつて之を渡り、ガリバルデーはカブリノへ、ビードモント軍はワプリオへ、佛軍はカッサノ、ロヂ、ピッチゲットへ向ひ、その主要團がカッサノの大街道を進んだのも亦た同じ例である。

此の線路は相互の間隔が各縱隊互に援助し合ひ得る位でなければならぬ。

此の如き次第であるから作戰線は必しも唯一の線路といふ意味でなく、縱隊の竝進する互に餘り隔らぬ交通路の全體を含むもので、時としては唯一の交通線に限られる。

軍は作戰線上で部隊、彈藥、糧秣、補充兵を動かし、兵廠、病院等を設け、必要な給養補充を受け得る途を開かねばならぬ。故に交通線の鐵道が存在することが最も重要である。

作戰線の深み *Depth* (*Profondeur*) といふのは根據地と目標と距離である。故に根據地の兩端と目標とを連結した直線と根據地とで三角形の地區を成し、根據地から目標に向ひ作戰線が集合することになる。此の地區を戰略三角と呼ぶ。

戰略點に地理上と操兵上との兩様の意味がある如く、作戰線にも同じ區別がある。地理上の作戰線は圖上に定まつてゐるが、操兵上の作戰線はその目標に達する多數の線路の中から選擇して最も適當なるものを取らねばならぬから、作戰計畫の成否を決定する重要問題である譯である。作戰線に就いて考慮すべき條件は左の如し。

餘り深過ぎて第二次根據地を要するに至らぬこと、鐵道、道路、河流等があつて兵員及び軍資の運動に困難ならぬこと、略ぼ根據地と直角に走り、その端に在らぬこと、兩側が地物、中立國又は分遣部隊により確保されること等である。

軍は操兵に當り作戰線の掩護を缺き敵の襲撃により根據地との聯絡を絶たれぬことに注意するを要する。

此の外に尙ほ侵入線 *Line of invasions* といふ語が用ゐられる。是は沙漠地方の未開民族が群 *Hordes* を成して侵入する時に通過する全體を意味する。故に侵入線は大溪谷、平原、凹地等が大陸を種々の方向に分割した地帯に相當する。

根據地から目標に向ひ行進する軍は一司令官の下に在つて唯一の行進導線を取ることがあるも、二つ以上の部隊となり各別の司令官を有し、各別の導線を取ることもあり、近代兵力の巨大となつた結果として後者が普通となつた。その第一の場合には第一作戰線 *Simple line of oper* であり、第二は二又は多數作戰線 *Double or multiple line of oper* である。

一八六六年の伊太利戰役の初期には伊軍は二作戰線で戦ふ計畫を立て、ミンチオ、ポー下流の兩

線を取り、ガリバルデーの義勇兵は第二次的のティロール線を取つた。

一八七〇、一年の普佛戦争の獨軍は三大集團を成して三導線により佛國に侵した。

世界戦争の獨軍は白國及びリュクスンブル兩國の中立を破る積りであつたから、アーヘンからメッツの北の國境の間に六軍の根據地を置き、以南には一軍を數部隊に分つて配置し、第一軍はアーヘンから出發してリエデス、ブリュッセルを経てコンデーに向ふ大迂回運動を試み、多數導線の好例である。

二又は多數導線では互に分れた集團を成してゐるから、同一の目標に向ふ場合でも、作戰の初期には互に隔つた場處で行動し、互に聯絡を取ることが困難である。各別の目標に向ふ場合には此の困難は一層大きい。

同一の目標に向ふ多數作戰線は必ず集中 Convergent となり、根據地の掩護は完全で、各集團は次第に互に接近する。此の他に平行 Parallel 又は分出 Divergent する作戰線も事情によつては出來得る。平行作戰線は各異つた目標を前定し、その例少く、分出線は根據地から互に別れて進出する場合で敵軍が種々の方向に在る時に必要となり、一八一三年奈翁がドレスデンで東北西三面に向ふて作戰を試みた如き、普軍が一八七〇年にセーヌ河窪地に入つた後にノルマンディー、ブルターニュ、ロアル、ソーヌ、里昂等に向つた時の如きはその例である。

平行又は分出作戰線を採用すれば敵軍の各箇の互に隔絶してゐる間にその一つづつの集團を打破するを得策とし、自箇の兵力を諸線の一に集めてその何れかに當るのである。その結果として作戰

線に内線的 Interior と外線的 Exterior との區別が起る。内線は活動する防禦軍に頗る都合よく、優勢な敵軍を各別に攻撃することが出来るに反し、外線の方は兵力の決定的優勢と廣い根據地とを要し、炯眼を有し元氣の旺盛な敵軍に對しては頗る危険である。

此の例は一七九六年に塙軍がロンバルデーを失つた後に四回までマンツアを救はんと試むるに當り何時も多數外線上に操兵し、その二回は分出的であつた。而して之に對する奈翁は常に内線により之を打破し、劣勢の兵力を用ゐて勝利を得たクラシカルの典型となつてゐる。

信濃に於ける新第三紀層褶曲地帶の

特性と其の成因

本 間 不 二 男

一、緒 言

信濃中部に於ける第三紀層の層序に關しては昨年（昭和三年）四月以降五回に亘つて記載し、最後に第三紀層堆積後に起つた造山運動の存在を僅に物語つたのみで筆を擱いた。續いて新第三紀及び第四紀の地殻變動は地力學的の立場から昭和三年八月號の東洋學藝雜誌に略報せられ、本稿以下に物語る所の梗概をなした譯である。